

中学、高校、大学と、私は自然に対する感動も何もかも失って、ものづくりのアイデアも浮かばないまま、ただ凡庸に過ごしてきた。大学はひよんな経緯から美術系の大学に進んだのだが、それほど興味も才能もあつたわけでない。ただ単純に東京に行きたかった。魅力を失った田舎から脱出したかったかもしれない。しかし、東京という都会に期待するものは初めからない。何も見つかるはずはないと思っていた。次第にアルバイトに勤しむことの方が多くなって、私は講義さぼりの常習犯になった。

アルバイトは『美術造形』といって、所謂、舞台美術や広告PRの立体デザインを手掛ける仕事だ。サイン看板だとかウインドディスプレイなども美術造形の仕事の一つで、立体造形物を強化プラスチックや発泡スチロールで作るような仕事がメインだった。私には堅苦しさを憶える芸術というよりも、そうした職人的なものづくりの方が肌になじんで面白かったのかもしれない。お陰で4年生の春頃、単位が足らず留年か退学を選択する羽目になった。迷わず退学を選んだのはギリシャ美術以外に興味を持てるものもなかったし、授業料の支払もきつかったからだ。

私は当初きつい会津訛りが抜けないために人とのコミュニケーションに苦労した。恥じる思いが寡黙な気難しさになってしまふから、誤解を生むこともしばしばだった。その反動からか饒舌な関西弁のチャラけた冗談が嫌いだった。チャラけた風に声を掛けられると、私はからかわれたと勝手に誤解してカッと頭に血が上ることも度々だった。返す言葉に詰まっては気まずい雰囲気を作ってしまう。会津訛りが原因で人付き合いに嫌気がすると、耐えきれずに転々と仕事を渡り歩いた。

大学を退学して十年近くも就職もせずにアルバイトで渡り歩く先は、やはり美術造形の会社が多かった。しかし、どの会社からも私は重宝がられた。美術造形の仕事は一から設計して同じ物を作らない一点ものだから、作業手順が重要になる。複雑な工程になるか簡便になるかはデザイン画を見て判断するその人の器量次第だ。私はそのことに長けていた。だから、丁寧で仕事がゆっくりに見えても、実は誰よりも早かったのだ。

ある日、社長が仕事の相談で私を呼んだ。

「Y君、これ！何日で出来るかなー？」

造形会社の社長は、皆、美術系大学の先輩だから多少歳は離れても友達のように話す。

「実は、納品まで5日しかないんだ。でも、上得意先だから、断るのにもナー・・・」
デザイン画は直径が1800mmのFRP製地球儀の半球で、展示館天井に吊るす図だった。その半球に月から見た地球を精密に色分けしながら立体的に仕上げなければならない。筆書きはタッチが目立って使えない。着色ラッカーでスプレー描画して写實的に仕上げなければならぬのだ。緑の草原、盛り上がる山脈に雪、海、湖、砂漠、そして偏西風を思わせる雲の帯、色分けだけでも十数色は使うだろうか。通常であれば3人掛かりで8日は必要だ。海と陸の境界線のマスキングが主な仕事で、それが済めば、ギリギリ何とか終わるような仕事だと思った。

「マスキング傭員は、何人使えるんですか？」

「実はなー、ベテランスタッフは他の仕事に追われているから、この前入ったばかりのK君だけだ。俺も手伝うし、Y君入れて3人だな」

「どうせ、徹夜しても、やるしかないでしょ？」

「まあ・・・」

でも、K君も社長も当てにならない。特に社長はやばくなると、後を任して途中で抜け出すのが得意だ。それでも私はその仕事を受けた。難しい仕事は今まで何度もこなしてきたし、難しいほどムクムクとおかしな情熱が湧いてくるからだ。

従来のマスキング方法はトレースした境界線にマスキング用のテープを張って、その境界線をデザインカッターで細かく切り裂いていくから、フィリピンなど複雑に島が入り組んだ図は数倍の手間が掛かる。果たして、その工法で、このメンバーで、徹夜しても仕上がるのだろうか。どう計算しても到底無理だと思った。もっと簡潔な工法で強く密着をさせて、簡便に剥がすことが重要だ。その材料は何だろう。と、ボンヤリ空想していたら、回転体で石膏の凹型を作った授業のことを思い出した。私はその授業で、粘りの強い雪花石膏に似せて作ろうと琥珀のように樹液が固化した❖を使用した。古典美術で知った雪花石膏を加熱せずに簡便な方法で出来れば、強い凹型ができると思ったからだ。

今、空想するのは凹型のことではない。たまたま、その❖液が机に落ちた箇所があった。それを見ると、しっかり乾いて透明に光っていた。カッターでそぎ取ろうとしても頑強にくっついて取れなかった。3日後の授業も同じ工房で同じ机でやった。そしてあの箇所を見ると、皮がむける様に剥がれかけている。指で擦ると簡単に取れたのだ。

あれはどういう現象だったのだろう。そんなことを考えていると頭の中が次第に熱くなってきた。幼い頃、見境なく夢中になった思いが蘇ってきて、いよいよ眠れない。私は❖

の溶かしたものを探し出して、いつの間にか夜中じゅうその樹液と格闘していた。

翌日、持ち込まれた大きな球体を塗装ブースに運んで、真っ白なラッカーサーフェイサーを全体に吹き付けた。白く乾いたその球体に3人がかりで背伸びしながら世界地図をトレースした。

「今日は、ここまでだな」飽きっぽい社長がソワソワしながら言った。

「いいんですか？」私は2日続けての徹夜も覚悟していた。

「もう、7時だしなー。明日、早くからやろうよ」

社長はもう帰りたくて仕方がない。K君も同じだった。

私は、後片付けすると言って塗装ブースに戻った。トレースする合間に❖液を何か所かに筆塗りしておいたので、ラッカーとの密着が気になっていたのだ。

思った通り密着は完璧だった。さあ、次が問題だ。昨夜試験して水に溶解するのは確認していたから、霧吹きの水で濡らしては拭き取った。何度か試すと❖は溶け出すのがわかる。しかし、厚めに固化した部分を落とし切るのは大変だった。実際の工程では❖の上にはラッカー着色の塗膜があるから尚難しいだろう。水に変わるものを探さないと無理だと思った。

時計を見るとボヤボヤ考えている間に夜10時を過ぎようとしていた。もう、後片付けして帰らないと電車がなくなる。試験した箇所をドライヤーで乾かしながらも、まだグズグズしていた。すると、ドライヤーで熱を掛けた処の❖が剥がれようとしているではないか。慌てて、高温の工業用ドライヤーに替えて他の箇所を試すと、やはり同じように、熱でプクッと浮き上がるのだ。

『これだ！あの机で見た現象と同じだ』

何か所か同じことを繰り返した。しかし、剥がれるには剥がれるが、僅かに剥がれないで残る箇所もある。ところが、熱が上昇して剥がれだす様子を良く見ていると実に面白い特徴があった。それは以前、ニカワで経験した現象に似たものだった。私は『わかった』と、思った。

すぐコンビニに走って♥を買って来て、❖の液に♥を混ぜ合わせ❖♥を作った。3種類に配合比率を替えて順繰りに塗っていった。そして、A、B、C、と、それぞれの箇所に付箋紙を貼った。

その❖♥を、慌ててドライヤーで乾燥すると、マスキングは壊れてしまう。常温で乾燥を待つしかない。私は、事務室の長椅子で仮眠して❖♥の乾燥を待つことにした。もう、

とうに帰ろうとする気持ちは失せてしまっていた。

朝早くにK君が出勤した。

「あれ？Yさん、徹夜したんですか？」

「ああ、ちよつとね。どうせ社長は来ないよ、コーヒーでも飲むか？」

「いいんですか？」

「もう、出来上がったようなものだ」

その後、ドヤドヤとスタッフが出勤して来た。社長は相変わらず遅い、早朝出勤の約束など、自分はどうでも良いと思っているのだ。

最古参のTさんが、サイホンでコーヒーを点てながら、

「Y君、徹夜したの？・・なあ、あの地球儀組は大変だろう。社長は口ばかりだしね」と、笑った。

「頭から、当てにしませんよ」

会社のスタッフは総勢8人だ。社員は誰もいない。能力や経験に応じて固定給与や時給も違う。技術に長けた者は条件が良いところを渡り歩くから、私と同じように造形会社を転々とする者も少なくなかった。Tさんはその最たるもので、社長と同じ年でも放浪癖があつて、頭から独立など考えない、しかも優秀な技術者だった。だからスタッフも一目置くと、私とも一番に馬が合う人なのだ。

朝はお茶を飲みながら、作り物の種類で何組かに分かれて、製作手順や担当などの打ち合わせをする。或る程度美術製作に関係する経験がないとできない仕事ばかりだ。忙しい時は美術系大学の学生を雇って簡単な仕事を分担させるのだが、大学の行事や試験がある時はその学生も呼べなくなる。ちょうど今時分がその時期で、学生は誰も来ていなかった。

「やあー、すまん、すまん」そう言って、社長が顔を出した。

遅刻したことに悪びれる様子もない。のんきというか、こだわらない大物というか、まったく憎めない性格なのだ。

「あら、Y君、徹夜したんだって？いやー、悪かったね」
皆、クスクス笑っている。

私は、取りあえず海の部分だけは、プルシヤンブルーで塗装し終わったと言った。

「エッ、ウソだろう？・・一晩で？・・まさかあゝ」

「塗装ブースに行けば、わかりますよ」

Tさんも、K君も、スタッフも皆振り向いて私を見た。それからドヤドヤとスタッフ全員で塗装ブースを覗きに行った。重い鉄の扉を開くと、

「アラアツ・・・」ため息のように声が上がった。

海は真っ青に染まっている。太平洋も大西洋もインド洋も、真っ白な陸地との境はくつきりと正確だ。それを見て皆驚く。下地に罫書いたトレース線がようやく仕上がったのは昨日の夕方だった。それは誰もが見て知っている。だから、皆呆然と驚いているのだ。インドネシアやフィリピン島の複雑な陸地を間近に見ながら、ズングリ社長のとぼけた驚きポーズが可笑しかった。

私の大好きな、懐かしい驚きの顔だ。

「たった、一晩で？・・・」

「社長、一晩も掛かりませんよ。やり始めたのが二時頃で、マスキングを外し終えたのが、五時頃だったかなー・・・まあ、約3時間くらいでしょう」

私は何事もなかったように、平然とした顔で言ったものだから、増々不思議がってブルーの塗膜の乾燥を確かめたり、マスキングのカッターの後を探したりして大騒ぎした。

Tさんが、

「社長、しっかりブルーは乾いているから、塗装して2時間以上は経っていますね。それに、マスキングを切ったカッターの傷がなくて、きれいですよ」

「アツ、ほんとだ！・・・なんで？」

「・・・それは、ちょっと内緒ですね」

従来の工法では、3人で早くて三日は掛かるはずだから絶対に無理だ。皆、マスキングに秘密があると思っている。また、そのマスキング工法を聞きたがっていた。あれを使つたものだろうとか、こんな薬品を使つたとか、勝つてな想像をして聞き出そうとした。それは全くトンチンカンなもので、私も徹夜状態で疲れていたし、優れた技術者には許されるプライドがあると思っている。そうそう簡単に教えられるかと、無視して笑った。

事務所に戻って、私は二晩続きの徹夜状態で疲れているから、今日は帰らしてもらいたいと社長に言った。そして、明日からはK君も社長の手伝いも要らないから、他の組にまわしても良いと言った。ただ、この仕事は、私が一人掛かって二日で仕上がるが、これを使ったマスキングでないと納期には間に合わないだろう。この材料も割と高価なものだし、特別ボーナスを貰いたいと話した。

「どのくらい？・・・」

私は、掌を出して5本かざした。

「エッ・・・」

するとそこに、Tさんが顔を出した。社長は困ったように私の要求のことを話した。

「ちよつと、いくら何でも50万は、高いよなあー」

「社長、時給と別に5万円ですよ」私が言った。

「ああ、そう・・・あー、びっくりした」

Tさんは、あの仕事はマスキングだけで3人工、7日でも仕上がるかどうか怪しい。7日で単純計算すれば人件費は21万円だから、それは安いくらいだと説明した。さすが、技術者の渡り鳥だ。

「よし、わかった・・・でも、どんな材料なんだよ」社長もこの仕事から解放されるから、笑顔を見せて承諾した。

「いつかは、見せるけど、今はダメです」

私は、もう一つ条件があると話した。

作業工程は誰にも見せたくない。作業中は、塗装ブースの内側から鍵を掛けるのを了解してもらいたいと言った。

「あのなー、それ鶴の恩返しじゃなくー、鶴の倍返しにならない？」

「まあーね・・・」そう言うと、3人で笑った。

造形会社はそういう融通が利くところがある。だから技術者は面白いと思うのだ。約束通り、私は2日で完成させて地球儀を披露した。作業現場は隔離されて誰も覗けなかったから、興味深々でスタッフ全員が集まった。

扉を開けた社長が、そつと地球儀に触れるようにマジマジと見て、私に聞いた。

「ハーツ？・・・一体何色使ったのよ」

「何色使ったか教えてないから、自分もわからないですね」

色数が多い分、マスキング作業が増えるから、その色数にも驚くし逆マスクも多くなるよ、通常のマスキングでは同じ部分にカッターを入れることになる。その部分は切り口が深くなくて、マスキングテープを外す時に塗膜が壊れて剥がれ落ちるのだ。そして、その修正も大変な作業になってしまう。私の液体マスキングはまったくカッターを使用しない。だから、傷一つないし補修も必要なかった。

「近くで見てもきれいに仕上がっているね。Y君、大したマスキングだなー、完璧だね」

Tさんは、感心しきりの様子で私の肩を叩いた。

その日の夜、Tさんに誘われて居酒屋へ行った。Tさんとは技術的なことでも、考え方も気が合った。私はマスクングの作り方は明かさなかったが、その使用方法や剥離の仕方など隠さずに話した。

「フーン、そうなんだ。面相筆でも塗れるというのは凄いなー・・・剥離方法も画期的だね」

「剥離方法には大分悩んだけど、昔を思い出して加工したらうまく活きましたね・・・偶然といえば、偶然です」

「でもな、着色塗装は造形物の最終工程だから、いつも納期に追われて困るんだ・・・Y君は、その液体マスクングを売ろうと思わないの？」

「売るんですか？」

「それを欲しがる造形会社はほとんどだと思うな。それに皆、困っているしね」

「いくらで、売れるんでしょう？」

「必要性和その性能があれば、高くても売れるよ。ホラッ、あの社長だって、人工計算を考えたからポーンナスを出したんじゃないか・・・見せても似たような物を作れないなら、売ってやることも大事なことだと思う。造形会社は皆、例に漏れず納期に泣かされている・・・」

「俺に、そんな商売できるかなー」

「まず、あの社長に、いくらだったら買うか聞いてみたらいいよ。とぼけた人だけど、俺と違って、そういうところが商売人さね・・・」

Tさんは、そう言って笑った。

しかし、私は液体マスクングの販売に躊躇していた。❖の購入先はギリシャ美術のF先生から教えられたもので知ってはいたが、❖は特殊な自然素材で、輸入ものだから高価だった。また、或る量を安定的に確保できるか不安だったし、私にそんな商売をする自信もなかったからだ。

そうこうしている間に私の噂は広がって、複雑な着色塗装や納期の無い仕事、他の造形会社からも舞い込むようになった。美術造形会社は横のつながりが強く姉妹会社のようなものだから、ズングリ社長やスタッフ達が私の噂を広めたのだろう。いつの間にか塗装ブースは私の専用になって、来る日も来る日も着色塗装に明け暮れた。当然、技術料として私の実入りも多くなったが、ある時期から塗装ブースのシンナーを吸い過ぎて、頭の痛くなることも珍しくなくなると、私はシンナー中毒を恐れるようになった。

そして、Tさんの言うように、ズングリ社長にそれとなく聞いてみた。

「社長、このままだと俺マズイから・・・マスクング剤の使用法を教えたら、いくらで買います?」

あの地球儀に使用した液体マスクングは、全部で300グラムしか使用していないことや、剥離までの条件付きタイムラグ、湿度などの変化で剥離しない処は水で擦る手間もあるなど、欠点も説明に加えた。

「エッ! たった300グラムなの?」

「それ以下かもしれないです。いくらも使わないから、高く買ってもらわないと商売になるかどうか・・・」

社長はその使用量の少なさにも驚いて、逆に感心していた。そして、高価な接着剤を例に挙げて親身に相談に乗ってくれた。最終的に提示された価格は、私の想定した額よりもズツと高い値段だった。

「Y君、どう? この値段だったら、皆、喜んで買うと思うけど・・・安いかなー」

「いいえ、充分です。ありがとうございます」

私にとつてもいい副業にもなるし、その技術を教えて喜ばれると思うと嬉しくなった。それに塗装ブースからも解放されるかもしれない。

早速、翌日に皆を集めて講習会をした。

罫書いた線に、細い筆で液体マスクングを使って枠取りをする。次に平刷毛で広い部分を塗り込んで、マスクングは終了だと実演した。

「エーッ、そんだけ?」

「常温で20分くらい放置して乾かすと、シンナーでも溶解しないんだ」

「ドライヤーですれば3分くらい乾燥する?・・・」

「残念ながら、ドライヤーは使えない」

「なんでエ・・・」

後で、その理由がわかると言って、常温乾燥を待った。

「マスクングの剥離は、このドライヤーで熱風を掛けるだけさ・・・いい、近くで良く見てよ・・・」

そう言ってドライヤーを吹き掛けると、乾いたマスクング膜が浮いて、パラパラと崩れて剥がれ落ちた。

「ウツソー、マジックじゃね！」

「ほんとだ、はみ出したラッカー塗膜ごと剥がれてら・・・」

「何だったの？これまでのマスキングは・・・信じらんねー」

Tさんが、そつと声を掛けて来た。

「聞くのと、見るのじゃ大違いだなー。Y君、改めて驚いたよ」そして、「皆、何を考えているか、わかる？・・・納期に迫られる辛さから解放されるのさ・・・ホラ、ネッ」

技術は共有することに意義があることを、嬉しそうに教えてくれる。Tさんの言うように、皆の役に立つことが大事なことだと改めて知らされた。

その後、マスキング剤は確かに副収入になったけれど、各美術造形会社に広まっても、それだけで独立はできなかったから、相変わらず私はアルバイトに勤しんでいた。

Tさんは会社を辞めて又放浪した。しばらく二年ほど経って、そのTさんから連絡があった。マスキング剤が大手家電メーカーに採用になった。それも量産ものだから、毎月20キロ程度安定供給できるかと聞いてきた。Tさんはその頃出始めた3Dプリンターを販売する会社に引き抜かれて、3Dモデリングの説明要員として活躍していた。

「Y君、もう君もいい歳だし独立してはどうか・・・あのマスキング剤を更に応用して、作ってもらいたいものがあるんだ」

「俺にできますかね」

「ああ、できるよ。他の家電メーカーも君のマスキング剤を欲しがっているから、もうすぐ注文も入る。君の競合相手は誰もいないよ。それに・・・」

今度、新機種のカラー3Dプリンターを出すのが、大きな欠点があるから表面処理剤をあれこれ試している。その表面処理剤を液体マスキングで応用すればできるのではないかと相談された。そして、この分野はまったくの隙間産業だから、ベンチャー創業を目指すにはもってこいの分野だと言った。

UV（紫外線）レーザーによる3Dモデリングは、革命的な造形技術として登場したので、私も早い時期から関心を持って展示会に足を運んでいた。その造形システムは、大容量のコンピュータソフトを駆使したとしても、結局はネガポジ関連の技術だから話を聞いてピンときた。モデルサンプルがあるなら、すぐにも試験してみたいと話した。

Tさんからのアドバイスで私は今の会社を創業した。3D表面処理剤の他にも幾つか特殊な処理剤を作ったことで、次第に会社は忙しくなってくる。売り上げも伸びて社員も雇

えるようになると、ベンチャー企業の一社として国からの補助制度もあって、試作開発や人件費などの金銭的支援も受けられるようになった。

マスキングを応用した処理剤は一般売りとは違って特殊分野の開発ツールだから、それを求めに来るのは企業の開発を手掛ける人達が多かった。それもまったく異なる業界だから企業ごとに使用目的もまるで違う。若い社員などとても理解できない上に、任せることもできないから、私だけが増々忙しくなってくる。それでも私は、何故かどこかで、その忙しさを楽しんでいるのだ。

ある時、各企業との個別会議も面倒だからと合同会議をやることになった。それぞれ分野の違ったメーカーなのに、私を仲介にすると肩肘張らないディスカッションが生まれ、いつの間にか異業種交流になってしまふ。それが参加全員に好評で、実に有効な情報交換になった。感性の異なる種の情報や発見は新鮮味を加えて逆流してくるのだろうか、マニアックでプロフェッショナルなアイデアが生まれてくるから不思議だった。全員がそう思ったに違いない。

勝って次第に進化していく私の処理剤も、そうした情報から万華鏡のように思わぬ分野へと製品を増やしていった。そして、私の関わり知らぬところで海外へ持ち出され、採用されていることなど小耳にはさむようになってくる。

三

ある日突然、韓国人が会社に来た。表面処理剤に特別な関心があつて来日したと、片言の日本語で話された。韓国で指折りの有名大学を名乗る大学教授の名刺を出して、

「・・・是非、韓国の研究室に来てもらいたい」と話した。

そして、現在開発中のものに、私の処理剤はとても優秀な結果を残している。今後処理剤の購入量も増えるだろう。だから共同試験に是非とも参加して欲しい。と、何度も口説かれた。国外から直接の依頼にも驚いたが、帰られた後、受け取った文献資料を調べて見ると、ナノメタルの研究者で世界の化学紙にも名を連ねる教授だった。その後、再三のメール内容から興味を覚えた私は韓国の大学に行くことにした。

教授の研究室は思った以上に格式が高く、先進的な設備と最新機材が整備される研究室で、正直驚かされた。更にキャンパス内に一流企業の社屋が目立っているのは、所謂、産学協同研究が日常的に行われていることを証明していた。また、あまりに立派過ぎて、こ

れに並ぶだけの先進的な設備環境を有する日本の大学はあるのだろうかと心配になった。

各所の研究室を見学しながら、教授から多くの研究員に紹介された。研究員の中には留学経験から流暢な日本語を話せる人も何人かいたし、皆、礼儀正しくフレンドリーに歓迎してくれた。5つに別れた研究室ではナノ銀がメインテーマとなっている。テーマごとに分担された試験設備を基に、日々データ取りを積み上げ総合的に検証しているというのだ。私の知らない分野のナノ銀解説は、直に教授から伝授されその貴重な資料も頂いたが、共同試験の詳しい内容は、まだ良く理解できていなかった。

それでは帰るに帰れないから、その後も何日か掛けて研究室に通った。3日ほどの解説と質疑応答があつて、ぼんやりと私の役割も覚えてきたので、ようやく日本に持ち帰ることが出来そうだ。表面処理剤の詳細な改良点はメールのやりとりでも可能だろうと教授も認めてくださった。

元来の性癖なのか、私がナノメタルの能力を知るようになって、教授から材料を取り寄せ自分なりに様々試験した。そして、提供された資料のように優れた抗菌能力を確認すると、共同試験はむしろ私の方が強く望むようになっていった。その後韓国を訪ねたのはちょうど二年が過ぎようとした頃だった。ナノメタルをまだしっかり理解できているわけではないが、教授にナノ銀の最終目的は何かと尋ねると、自然に無害な代替農薬だと、はっきり日本語で話された。

私は言葉に出せない衝撃で驚くしかない。農薬に対する深い遺恨はいつまでも奥底にあったから、何か因縁めいた見えないモノを感じた。

そして、私などが関わることが出来るのかと訊ねた。

「日本の権威ある試験機関で、あなたが行った抗ウイルスの試験データは韓国でも大いに役立つている。また、2年間のメールの中でレイチェルカーソンの著書に触れて意見し合ったことがあった。そこで、有機化合物の危険性を既に気付いていて、強く憂いているあなたを知った。だから心配していない」

「お役に立ってますかね？」

「日本で最も熱心なナノメタル信者ですよ。それに、あなたのアイデアはとても面白いです」

教授は私の小さな会社も知っているし、日本の試験機関での費用が既に一千万円近く掛けていることも、暗に認めてくださっていたのだろう。ナノメタル原料の独占販売契約は、

私と教授との間で取り結ぶことになった。

代替農薬の研究は、野菜や果物を育てるのに一年の歳月を要する試験だから、費用も時間も掛かる。私は他にナノメタル原料や応用商品もあって、大学や会社の研究機関にも販売していた。しかし、代替農薬は特別だ。労力ばかりでなく、その大変な費用は私の会社だけでは賄いきれない。自力では到底無理だったし、残念ながら日本で協力する会社などまったく見当たらなかった。

それでも、私の小さなものづくりから始まってナノメタルに出会い。今、私の開発メイテーマは代替農薬になった。農薬に対する私の強い遺恨が巡り合わせたのだろうか。不思議な縁だと思っている。小さな力でも偶然にここまでたどり着いたのだから、どんなに時間が掛かるうとも、あの見えなかったモノへの遺恨を少しでも晴らしてみたいと思った。

私はホタテ殻粉末とナノ銀をケミカルボンディングして、新たな開発品を試作した。ホタテ粉も抗菌性はあるが僅かな効果しかない。ナノ銀と抗菌メカニズムが良く似ていることで、お遊びで合成してみたら相乗効果があることに気付いた。それを野菜や果物などの包装類に混合すると、ナノ銀原料を混合する韓国方式より抜群の鮮度保持効果を現わした。それも濃度が半分以下と低くても、目に見えるカビ菌の発生も極端に少ないのだ。ハウス栽培ではカビによる被害で収穫に影響することは知っていた。韓国からの情報では、ラン栽培などは農薬散布しても5%がカビでやられると言っていたし、野菜果物も同様の被害が多いと聞いている。

また、ホタテ養殖によるホタテ貝殻の産業廃棄物は、海の公害にもなっていて、山積みになっているか海岸に廃棄している。その再利用は相当前から大きな課題で、これまで全く解決されていない。国のプロジェクトにより、高温で焼成して塩分を除去し粉碎するシステムを完成させた。私は環境保護による循環型事業のモデルとして感心していたし、このプロジェクトは成功するものと信じて疑わなかった。ところが、加工費用が高んでいるのか、廃棄物利用なのに商品化されたホタテ粉末は、何故か想像つかない程のコスト高になってしまった。ホタテ粉の利用を考える以前にコストが邪魔をするのだから、どうしてもホタテ粉の再利用は進まなくなるのは当然だ。納得のいかないプロジェクトだと、私はずーっと残念に思っていた。

私はホタテ粉をナノ銀と再加工して付加価値を与えれば、無農薬栽培にも役立てる。ま

た、畑地への散布が全国的に進んで行けば、ホタテ貝以外にも貝殻の産業廃棄物は有効利用されることになるだろう。東北の海上養殖業者が、養殖貝へのミネラル補給を促すために、山へ植林をした。今度は海の恵みを、陸上の恵みに貢献する時だ。

ホタテ粉とナノ銀の合成は、人が食べても安全な抗菌剤だし、物流時の鮮度保持にも貢献する。更に農薬散布もいらなくなればコストの問題も解決するだろう。この事業は正しく循環型事業になると信じている。そして、韓国式のナノ銀代替農薬にこのアイデアはない。これが、私の新たな情熱の源になった。

しかし、あれからもう10年が経過している。

昨年暮れ、N大学の中野教授がナノ銀を使用した濾材研究の経過報告に來られた。糞尿や汚泥水の最終処理に、ナノ銀を担持した濾材は優秀な結果を出した。これまで活性炭以上に結果を出す濾材がなかった上に、ナノ銀以外の抗菌剤の合成には、様々な問題があり過ぎて前進するどころか後退気味だった。ナノ銀の合成は濾材の性質に影響を与えないばかりか、他に比べて有効に抑止する結果を出した。更に、特筆する面白い現象が見付かったと話された。

今度、その研究成果から補助金が出ることになったから、来年は規模を拡大して実証試験したい。もちろん今までのように無償サンプルのナノ銀でなく、正規に購入するし、人件費も計上できるので、協力をお願いしたいと報告に來られたのだ。

私の実証試験は子どもの頃と変わらぬ幼稚なもので、大学のように数値グラフで詳細に表すことはできない。私の所有する試験器具も予算的に情けないものばかりだから、国内の大学との共同研究は大変ありがたいことだと思っている。それにもう試験機関を利用する費用も底を付いた。

「先生、これ見てください。何だかわかります」

「この粉？」

「ホタテ貝の粉ですよ・・・」

「使ったことあるけど、こんなに細かくなかったなー」

「ナノ銀と反応させてみたら、5倍に加熱発泡したんで驚きました」

鮮度試験で撮影した写真を先生に見せた。キャベツ、イチゴ、桃などの比較写真は、明らかに鮮度保持効果を現わしている。

「触媒作用が顕著だね。ナノ銀を担持した濾材にもそれがあつたよ」

帰り際、ナノ銀ホタテ粉のサンプルを差し上げて、お遊びのような実験経過をお話したら、先生は意外な興味を示されて帰って行った。

大学の春休みが終わって、中野先生からまた連絡があった。

中野研究室が所有するハウス栽培地が、新種らしいウイルス菌で広範囲にやられていると言う。農機具やゴム長靴に付着した汚染土を僅かでも持ち込むと、菌は栽培地に繁殖してしまうと言うのだ。電話口では、ずい分な慌てようだ。一般の畑では既に石灰や農薬散布がもう始まっているらしい。もし、大学のハウスに農薬を散布すれば、化学薬品を使わないという条件での研究が台無しになると危惧しておられた。

「実は、先にもらったサンプルのナノ銀ホタテ粉で胡瓜を試したら、その比較結果に驚いた。濃度が低いのに、ビックリだね」

「先生に確認されるのは自信になります」

「だから、今回の件は、それしか頭に浮かばなかった。どうかね、5キロばかり、すぐにでも送ってもらえれば嬉しいんだが・・・」

しかし、ナノ銀ホタテ粉の合成はこれまで手作りで、私が一日かけても僅かに数百グラムしか作れない。今、手元にあるのも数百グラムだからと説明した。

「こちらの研究員総出で掛ければ、ある量は確保できないかなあー。近隣の農家も、死活問題になっているんだ」

研究室にある大型の集塵恒温庫も真空脱泡装置も、自由に使ってもらってかまわないと言ってくれた。

「それはありがたい。実は、お恥ずかしい話ですが、私なりに10年掛けた試験がありまして・・・バカだから、良く見えない現象が多くて困っていました」

早朝3時は、まだまだ冷え込んで厚手のセーターが放せない。風もなく穏やかな日なのに、真冬のようにシンシンと冷えるのは年々荒れる異常気象の影響か、半月前の桜の開花時にも雪が被ったことなど目に浮かんだ。私はナノ銀とホタテ粉の在庫を確認して車に詰め込んだ。

N先生の研究室は福島にある。私の故郷だ。

両親も亡くなると実家に帰郷するにも遠慮があつて遠くなる。その故郷へ春の季節に向かうのは何年ぶりだろう。もう、田んぼの土を起こす時期だ。苗代にはもう水が引かれて

いるかもしれない。温んだ水に素足を入れて田植えしたことを思い出す。泥の感触と臭いと、時おり背伸びして見る美しい風景が目に映る。しかし、皆、あれから変わってしまった。耕作地の少ない農家は変わってしまった。高価な農機具、化学肥料、農薬、減反、出荷制限。どの家も稲作だけでは生活が成り立たなくなった。真っ先に逃げ出した自分が言うことではないが、弟は地元の銀行員をしながら農家の後を継いだ。それでも採算のとれない農地は皆売り払ってしまった。父が生きている内はまだ何とかなつた。突然、父が亡くなると、耕作機械など借金もかさんで仕方がなかったのだ。

でも、あの山やあの川、鳥や魚、蛭や昆虫。そして甘い空気。それらは皆、懐かしい。それらは皆、私の先生達だった。あれから一体どうしているだろうか。

さあ、8時到着を目指して出発だ。

嘗て知ったその道を、望郷の想いで走って行こう。

高速道路はまだ照明の灯りで白線が白く光っていた。車はトラックだらけで行き交う車両はまだまだ少ない。事故も渋滞もないから私はいつも以上に飛ばして走った。佐野IC辺りにくると白々と夜が明けてくる。道路は右に左にカーブして山間を抜けるように快調に面白く走る。休みなしで那須高原まで走ったら、また急に暗くなつて霧雨が降り出した。

車での旅はいつもこうだ。山を抜ければ風が吹くし、海に出ればまた天候は急変する。そんなことを思つて走り続けると、宇都宮辺りで強くオレンジ色に朝日が差してきた。鮮やかな朝焼けの色だ。山の斜面に点在する梅か桜が茜色に輝くと、裾野を縁取る菜の花畑は緑と黄色にハミングして響く。久しぶりで見る春暖色に染めた山並が美しい。車は、四月の田園の中をあの懐かしいグライダーのように真っすぐに滑り下りて行った。

突如、私の車の前を横切るものがある。山並みを吹き抜ける風に乗って、ゆうゆうと白い大鷲が羽ばたいている。記憶を呼び覚ます白い飛翔だ。私は挨拶を返さなければとスピードを緩め並走した。目と目が合うような近さで、彼は懸命に翼を羽ばたかして飛んでいる。

“ごきげんよう・・・”丸い鋭い目を向けて、私を励ましているのか。

白鷺はまだ間に合うと言っているのだ。早く来てくれと言っている。

何か、確かに生きていると思つた。